

# 音楽の政治化：1889年パリ万博

## The Politicization of Music : The 1889 Paris Universal Exposition

---

井 上 さつき

INOUE-ARAI Satsuki

Though the 1889 Paris Universal Exposition is famous for Javanese gamelans and annamite dancers, which attracted many French musicians, the official musical events of great size, *Auditions musicales*, were also mounted during the Exposition. This paper discusses the process of the programming of the *Auditions musicales* through documents that the author discovered at the Archives Nationales de France.

There was friction between the organizers of the Exposition and the committee of the events concerning the content of the events. Georges Berger, one of the general directors of the Exposition, reduced the budget for the official grand orchestral concerts and planned a competition of *musique pittoresque*, i. e. French and European folk music, according to the proposal of a republican deputy for Bouches-du-Rhône with a view to curry favor with the constituency. (Berger was himself elected as a republican deputy shortly afterward.) Although it seems to be irrelevant to politics, the official musical events of the 1889 Exposition were influenced by the republican's power.

### 0. はじめに

フランスの第三共和制が始まったのは、1870年からだが、共和主義体制が固まったのは1880年代に入ってからのことである。共和派の大物ジュール・グレヴィ大統領のもとで、1880年代前半の政治を実質的に推進したのは、穏健派のジュール・フェリーであった。彼は文相や首相などを何度もつとめ、共和主義的自由、反教権主義、植民地拡大という三つの柱を立てて、第三共和制の基盤を築いた。ジュール・フェリー内閣のもとで商工業大臣となったルヴィエは、陳情が出されていた内国博覧会開催のアイデアを広げてフランス革命百周年記念に結びつけ、1889年パリ万博開催の構想を打ち出した。この案はすぐに受け入れられ、1884年11月8日付で1889年に万博を開く旨のデクレ（政令）が出され、検討委員会が発足した。

パリ万博にオフィシャルな音楽プログラムがとりいれられたのは1867年だが、それから3回目に当たる1889年万博では、初めて音楽プログラムが初期段階から全体の構想に組み入れられ、十分な予算が計上されたという点で画期的だった。1887年10月17日、「音楽展」の開催を正式に決定し、「作曲と演奏」の観点からこれを組織するというアレテ（省令）が商工業大臣ドートレスムから出され、具体的な準備が始められた。

1889年万博の準備過程では、「音楽展」開催に都合のよい人材が揃っていた。1887年10月の段階で、万博を司る商工業省の大臣の座にあったのは作曲家としての経験もあったリュシアン・ドートレスムであり、一方、万博の3人の最高責任者のひとりで、「音楽展」を直接管轄する立場にあったのは、これまでの万博の「音楽展」で辣腕を振ってきたジョルジュ・ベルジェであった。「音楽展」に関して1887年10月17日に出されたアレテの原案は、ベルジェが作成し、ドートレスムが署名したものであった。

ところが、実際にプログラムの編成にとりかかった「音楽展」の委員会側の意図は、ベルジェたちオーガナイザーの意図とはまったく異なっていた。では、「音楽展」のコンサートの企画を任された芸術アカデミー会員を中心とするフランスの作曲家たちと、ベルジェたち行政側とはどのような点で対立し、結果的にどのような妥協案に落ち着いたのだろうか。本論文では、フランス古文書館に残された文書などから、その点を明らかにし、「音楽展」の実際のプログラムが作られるプロセスを解明する。

## 1. 公式報告書による「音楽展」準備の概観

まず、公式報告書に従って、今回の「音楽展」の準備過程を概観しておこう<sup>1</sup>

報告書によれば、音楽展と演劇公演の委員会は、1886年8月26日に制定された22の委員会からなる「グラン・conseil」の一角をすでに占めていた。

1887年10月17日、「音楽展」の開催が正式に決定され、「作曲と演奏」の観点からこれを組織するというアレテ（省令）が商工業大臣ドートレスムから出され、具体的な準備が始められた。

今回は「作曲」の観点からは、2つの作曲コンクール——カンタータと軍隊行進曲——が開かれ、いずれもフランス国籍をもつ者だけが参加できた。一方、「演奏」の観点からは、1) さまざまな国のオーケストラのコンサート、2) オルフェオンの国内コンクール、3) 金管合奏と吹奏楽団の国内コンクール、4) 軍楽隊の国際コンクールの開催が予定された。

これらのイベントを実行するために「音楽展」の実行委員会が設置され、1) 作曲、2) オルフェオン、3) 金管合奏と吹奏楽団、4) 軍楽隊の4つのセクションに分かれて、規則やプログラムの制定が始められた。その後、第3セクションと第4セクションの委員会が合併し、市町村の吹奏楽団による国際コンクールが開かれることになった。

1889年2月28日、「音楽展」に関する最後のアレテが出され、新たにフランスと諸外国の「ミュージッ

1 (Alfred Picard), *Rapport général 1889*, t. 3, Chapitre X, pp. 342-352 が「音楽展」Auditions musicales, Chapitre XI, pp. 353-360 が「万博と百周年の祭典」Fêtes de l'Exposition et du Centenaire である。

ピカルは「音楽展」に関する記述の注で (*Rapport général 1889*, 3 : 342) 「執筆予定者が原稿を仕上げないため、この部分を短くせざるを得ず、また欠落もあると断っている。確かに間違っている部分が数箇所あるので、1889年万博については、日時や数字であっても公式報告書の記述をそのまま信用することはできない。

ク・ピトレスク（民俗音楽）」のコンクールと演奏会が追加され10名からなる委員会が設置された。それぞれの予算は、第1セッションが60,000フラン、第2セッション、22,600フラン、第3セッションが23,000フラン、第4セッションが25,000フラン、市町村の吹奏楽団による国際コンクールが15,000フラン、ミュージック・ピトレスクのコンクールと演奏会が5,000フランだった。

以上が、公式報告書に従った「音楽展」の準備の状況である。この概要から、「音楽展」の内容は前回、前々回の内容を踏まえたプログラムが生まれ、作曲コンクール、オーケストラのコンサート、アマチュアのオルフェオンや吹奏楽関係のイベント、それに軍楽隊のコンクールが行なわれ、これまでと同じように委員会が組織され、公的な音楽イベントの数々が催されたことがわかる。

しかし、このような「音楽展」の内容を、いつ、だれが、どのように決めたかについては公式報告書にはまったく記されていない。ここではまず、フランス国立古文書館〔AN〕の資料や当時の新聞などから、プランニングの経過をたどってみたい。

## 2. 「音楽展」開催決定まで

これまでの「音楽展」では、1867年万博ではラモンやレピーヌ、1878年万博ではレピーヌなどの音楽好きの官僚が「音楽展」の開催を訴え、それに対して組織委員会側が重い腰を上げるというパターンであったが、今回の1889年万博に関しては、組織委員会側が開催に主導的な立場をとっていたように思われる。少なくとも、国立古文書館には、「音楽展」開催を訴える文書などは残されていない。また、ジャーナリズムでキャンペーンが行われた様子もみられない。「音楽展」は最初から万博の一部に織り込まれていたのである。

1887年10月の段階で、万博を司る商工業省の大臣の座にあったのは作曲家としての経験もあったリュシアン・ドートレスム Lucien Dautresme (1826-1892) という代議士だった。ドートレスムは、エコール・ポリテクニク出身のエリートだが、一時作曲家としての道を歩んでいた。フェティスの音楽事典によれば、彼は自作のオペラ・コミックがテアトル・リリック座で上演されることが決まったものの、2年間も待たされたことに腹を立て、支配人カルヴァロを殴ったため告訴され、帝国刑務所に禁固6ヶ月の刑に服したという。その間に政治にめざめて代議士になったという変り種だったのである。ドートレスムは1887年5月30日、ルヴィエ内閣の元で商工業省の大臣に就任し、同年12月12日にティラール内閣に変わった後も留任し、1888年4月3日まで商工業大臣をつとめた。「音楽展」に関する最初のアレテに署名したのはこのドートレスムだったのである。なお、今回は、「音楽展」に関して、公教育・宗教・芸術省がかかわっていないことが注目される。委員の中にも、指揮者やパリ音楽院の事務局長など実務担当者はいるが、公教育・宗教・芸術省の役人は見当たらない。

一方、万博の3人の最高責任者のひとりで、「音楽展」が属する運営 Exploitation 担当は万博のエキスパートとして活躍していたジョルジュ・ベルジェ Georges Berger (1834-1910) だった。前回、前々回の万博で手腕が認められたベルジェは1881年の万国電気博覧会の運営を任され、大成功を収めた。電気に着目したベルジェは仲間とともに、電力会社を興し、実業家としての手腕を発揮した。こうして1889年の万博では、ベルジェは万博のエキスパートとしてこの万博での実務面の最高の地位で

あるディレクター・ジェネラルのひとりに抜擢されたのである。

1887年10月17日のアレテの原案は、ベルジェが作成したもので、国立古文書館には同年10月5日付けで、ベルジェがドートレスムに宛てて送ったアレテの前半部分にあたる「提案理由 Exposé des motifs」の原案と総額270,000フランの予算案が残されている（AN所蔵F12/3768）。ここで注目すべきは、ベルジェのアレテの原案にはいくつかの修正が施されており、しかも、その原案とドートレスムの署名入りで公表されたアレテとの間にはいくつかの相違点があることである。ドートレスムは決して、ベルジェの案を鵜呑みにして、署名したわけではなかったのである。

主な相違点を見てみよう。

ベルジェの原案では、「(…) 1889年万博のオーガナイザーは音楽に、よりシンプルで、論理的で、かつ経済的な表現方法を与える必要がある。したがって室内楽は問題外であろう」という一文がある。ベルジェは経済観念の強い能吏であり、これまでの「音楽展」でもしばしば音楽家側の要求を断固拒否した経緯があった。彼にとって、いくら芸術的な価値があろうが採算のとれないコンサートは開く意味がなく、その意図が「室内楽は問題外であろう」という一節にこめられていたと考えられる。1878年万博の室内楽のコンサートには聴衆が集まらず失敗に終わっていた（井上2004：29）。ベルジェはアレテの原案の1878年万博について概観する部分で、「それ（室内楽のコンサート）は平均300フランの収益しかあがらず、226席が埋まっただけだった」と数字を挙げて述べており、特に気にしていたことがわかる（この部分は10月17日のアレテにもそのまま印刷されている）。

実はベルジェの原案には線で消された部分があり、もともとは、「室内楽と歴史的コンサートは問題外であろう」という文章だったことがわかる。歴史的コンサートについては1867年の万博時に委員会が作られたものの、財政上の理由で立ち消えになった経緯があり、ベルジェの最初の構想では、室内楽も歴史的コンサートも入れる気はなかったのである。ところが、ベルジェは思い直して「歴史的コンサート」の部分を上から消した。「コンサートを開くことは問題外」という範疇から「歴史的コンサート」が外れたわけである。さらに、追加条項として、「オーケストラのコンサート」の部分に「コンサートプログラムは演奏曲目の選択によって、さまざまな段階の音楽芸術の歴史画（タブロー・イストリック）を示すように有益に作成されうるであろう」という一節が付け加えられている。1889年万博は革命百周年記念ということで、「過去を振り返る」という視点がクローズアップされた万博である。ベルジェが当初の案を修正して歴史的な視点を入れた条項を加えたのは偶然ではないだろう。

さて、原案の以上の部分が、実際に公表されたアレテでは、よりマイルドな表現になり、「1889年万博のオーガナイザーは音楽がその重要性にふさわしい位置を新たに与えるべきである」という表現に落ち着き、「この（音楽展）委員会は……歴史的コンサートやオルガン・コンサートのためのプログラムを提示することができる」という文が加わり、オルガン・コンサートへの言及が初めてなされている。ベルジェ自身はオルガンについてまったく触れていないのは象徴的である。

ドートレスム大臣にベルジェが送った「音楽展」の予算の内訳で注目されるのは、作曲コンクールがカンタータだけであることのほか、さまざまな費用が抑えられ、総額「130,000フランが前もってかかることが予想される経費」であるとされていることである。

一方、古文書館には別に「音楽展」予算案（仮にAとする）があり、こちらは内容からみて、ベルジェ案に修正を加えたドートレスム大臣案により近いもので、軍隊行進曲の作曲コンクールが項目に付け加えられ、さらに、歴史的コンサートとオルガン・コンサートを開くために作曲委員会に付託される費用30,000フランが新たに項目を立てて計上されている。ベルジェの原案の文言をドートレスムが修正した内容に沿った予算立ての変更だと考えられる。こうした変更の結果、総額は160,000フランに増えている。

実はこの予算案Aにはほかに興味深い点がある。項目自体は1887年10月17日に公表されたアレテとほぼ一致するが、その内容は同じではない。カンタータの歌詞に関してこそ「国内コンクール」であるが、カンタータと軍隊行進曲の作曲に関しては、どちらも「国際コンクール」となっているのである。ちなみにベルジェの原案では、この点についての言及はなされていなかった。

ところが、アレテが公表された時点では、すでに、作曲コンクールに関してはフランス国籍をもつことが条件に課されていた。だが、どのような理由でこの変更を行ったのかは定かではないが、外国の作曲家を締め出したこの変更は、決してよい結果を生まなかった。

### 3. 「音楽展」委員会の活動

1887年10月17日のアレテには、「ディレクツール・ジェネラル ベルジェの提案」としてすでに4つのセクションの委員会のメンバーが発表されていた。音楽専門誌『メネストレル』（1888年1月1日）によれば、12月28日、最初の全体会合が開かれ、各セクションの委員長と書記、レポーターが決定した。同誌によれば、席上、ベルジェが、カンタータのコンクールを開催することに批判があること、それを開催するかどうかは委員会で判断し、別のジャンルにするならばそれを決定してほしいと述べたという。確かに、作曲コンクールは1867年の試みが成功しなかったことから、1878年では開催されなかったものである。しかも、伝統的にローマ賞の課題である「カンタータ」を再びコンクールの課題にすることに異論があったのは当然であろう。

しかし、作曲コンクールとオーケストラの演奏会を司る第1セクションではこの決定は覆らず、作曲コンクールのジャンルはカンタータと軍隊行進曲の作曲コンクール開催に向けて準備が進められた。

#### (1) 作曲コンクール

##### a. カンタータ部門

作曲コンクールを司る第1セクションの委員会のメンバーには、いつもどおりアカデミー（学士院）の音楽部門の会員6人（トマ、グノー、エルネスト・レイエール、マスネ、サン＝サーンス、ドリーブ）が並び、委員長にはパリ音楽院院長でもあるトマ、副委員長にこちらもパリ音楽院作曲科正教授であるレオ・ドリーブが座った。この布陣からも見当がつくように、まさにアカデミズムの固まりのような委員会だった。報告者は『プチ・ジュルナル』の音楽欄を担当する批評家、ケルスト Léon Kerst（生没年不詳）が務めた。なお、当初発表された委員は30名であったが、フランク、ギロー、ラロの3人が後からメンバーに加えられた。

カンタータ作曲コンクールに際しては、1867年万博時と同じく、まず歌詞のコンクールが行われた。テオドール・ド・バンヴィルを委員長とする20名の文芸審査員たちが選んだ題は「89年（1世紀の歌）」というもので、内容に関しては、フランス革命百周年のみ、あるいは今回の万博のみを讃えるものではなく、フランス革命から100年間の進歩を讃える内容であることが推奨され、100行以内という制限がつけられていた。「フランス革命から100年間の進歩を讃える」という内容こそ、89年万博の中心的なテーマだったのである。ちなみに、22年前の1867年万博の歌詞のコンクールの審査員の中にもバンヴィルの姿があった。

記念カンタータの歌詞コンクールに対して、応募作品は170篇に達した。審査の結果、一等賞に選ばれたのはガブリエル・ヴィケール Gabriel Vicaire (1848-1900) という詩人の『八十九 *Quatre-vingt-neuf*』という詩で、彼には3,000フラン（公式報告書によれば4,000フラン）の賞金が与えられた。

ついで1888年5月この歌詞に基づいて作曲コンクールが開かれ、応募期限は89年1月末日に定められた。先にも触れたように、67年万博の際のコンクールでは外国人にも門戸が開かれていたが、今回はフランス人だけ、しかも期間は8カ月もある。さらに、1等賞の作品は褒賞授与式で実際に演奏されることがアレテに明記されていた。もちろん、67年万博でサン＝サーンスの受賞作品の演奏をめぐって騒動があったからだろう。そのとき苦杯をなめたサン＝サーンスもいまや楽壇の大御所に収まり、万博の委員会の上の方に名前を連ねていた。今回、1等の賞金は5,000フラン、2等賞には2,000フラン、3等賞には1,000フラン、さらに選外佳作2点に対してそれぞれ500フランが与えられることになっていた。

フランス人の作曲家にとってこれらの条件はかなり恵まれたものだった。外国人は参加できず、作品提出までの期間はかなり長く、1等になれば、褒賞授与式でかならず演奏されるばかりではなく、賞金も高額だったからである。

ところが、いざふたを開けてみると、集まった作品はわずか25曲だけだった。67年万博のときは応募期間が非常に短くおよそ40日間しかなかったのに国内外から102曲もの応募があったのとは大きな違いである。しかも、67年のときはサン＝サーンス、ギロー、マスネ、ビゼーをはじめ、当時の若手の有望な作曲家が多数応募したのにもかかわらず、今回はそうした作曲家はほとんど参加しなかった。そのあげく、審査の結果は入選作皆無、つまり、1等賞、2等賞はもとより、3等賞も選外佳作2点すらなしという結果になったのである。

コンクールの直後に、結果を報告した覚書がフランス国立古文書館に残されている（AN所蔵 F 12/3768）。それによれば、第1次選考では、委員会は3つの小委員会に分かれ、それぞれが25作品を審査し、ひとつの下部委員会が推薦した作品はすべてとりあげることにして、その結果、7作品が残った。第2次選考は全員で行い、そこで残ったのは2作品だけだった。この2作品を最終選考に残し、1889年3月7日に選考会を開き、集まった20人の委員で審査した。その結果、18対2で1等賞も2等賞も出さないことが決まり、さらに、19人で投票したところ、14対5で、選外佳作にもしないことが決まった、という審査経過だった。

委員会側は、コンクールがこれほど低調に終わったのは歌詞に問題があったのではないかと考え、歌詞の一部を変更することも可能として、再度作曲コンクールを開催しようとしたが、作詞者ヴィケールの強硬な反対に遭い、計画は頓挫<sup>2</sup>。結局、カンタータの作曲コンクールは完全な失敗に終わった。

#### b. 軍隊行進曲部門

一方、軍隊行進曲の作曲コンクールも決してうまく行ったわけではなかった。これは従来軍楽隊のレパートリーとなっている作品の音楽的な水準が低かったことから、その水準を上げようと企画されたものだった。音楽のなかの「序列」でいえば高級なカンタータと、より一般的な軍隊行進曲のコンクールの二つが開催されたところに、エリート主義と大衆主義が併存する万博の理念を見ることもできるだろう。

1888年3月7日に要項が発表され、同年10月末日に締め切りが設定された軍隊行進曲の作曲コンクールに対しては70曲の応募があった<sup>3</sup>。しかし、1等賞(3,000フラン)受賞作はなく、二等賞(1,000フラン)にガブリエル・ピエルネ Gabriel Pierné (1863-1937)、選外佳作にトゥッサン・ジェナン Toussant Génin (生没年不詳)の作品が選ばれたにすぎなかった。後年作曲や指揮に活躍したピエルネは、1882年のローマ大賞受賞者で、当時すでに若手作曲家としての地位を確立していたが、そのピエルネをもってしても1等賞はとれなかったのである。ちなみに、この万博の翌年、1890年、ピエルネはフランク没後の後任としてサント＝クロティルド教会のオルガニストに就任することになる。

軍隊行進曲の作曲コンクールに関しては、コンクール後の結果をまとめた報告書が国立古文書館に残されている。それによれば、70曲中、審査対象となった68曲のうち、ほとんどは「荘厳な行進曲」という規定を満たさない、凡庸な「パ・ルドゥブレ」に過ぎず、書法の誤りが非常に多かったという。「実際、これほど貧弱なコンクールを審査したことはほとんどない」という文章は報告書の文言としてはかなり強烈である(AN所蔵 F12/3768)。

さて、89年の万博の音楽部門の中心的なイベントであるこのふたつの作曲コンクールが再度失敗に終わったことを、どのようにとらえるべきだろうか。

主な原因のひとつに、審査員がこのコンクールを奨励的な意味で捉えず、あくまで歴史に残るような作品を求めたため、審査基準が非常に厳しかったことが挙げられる。そのため、一等賞はおろか、カンタータについては佳作賞すらまったく賞が出ないという異例の事態になった。89年万博の音楽について貴重な報告を残した音楽学者のジュリアン・ティエルソ Julien Tiersot (1857-1936)はコンクールに関し委員会の保守性を次のように批判している。「この行き過ぎた厳しさは何に起因しているのだろうか。なぜ、音楽委員会は芸術創作の新しい領域に対してこれほど極端な不信を抱いているのだろうか。それは経験からいえることだが、万博の音楽委員会は新しい音楽をまったく好まないからである。半世紀以上昔の音楽でさえ、「進んだ」傾向をもつ音楽は好まれないのだ」(Tiersot 1889: 52)<sup>4</sup>。

2 この点について、ヴィケールから送られた釈明の手紙については後に述べる。

3 *Mén*: 2 déc. 1888 によれば68作品。

さらに、今回の作曲コンクールでは、有能な若手作曲家がコンクール離れを起こし、コンクールに参加しなかったことも失敗の原因のひとつだった。当時はアカデミーの主催する伝統あるローマ賞コンクールのほかに大小さまざまな作曲コンクールが開かれていたが、コンクール自体が若手作曲家にアピールしなくなっていた時期だった。例えば、パリ市は独自に作曲コンクールを主催し、こちらは「独唱・合唱つきの交響曲」が課題（つまりベートーヴェンの第9交響曲と同じ編成）だったが、こちらも当時応募者の質の低下に悩んでいた。このような状況のなかで、89年万博の委員会が、67年万博時の企画そのままに、作曲コンクールの開催を強行したところに、委員会の保守的な体質が浮かび出していた。ちなみに、第1セクションの委員長を務めたトマを評して、この万博に際してパリを訪問したリムスキー・コルサコフは「アンティーク」と形容している（Rimsky-Korsakov 1981: 199）。

#### 4. オーケストラ・コンサート

##### (1) プランニングの経過

第1セクション（作曲部門）の委員会が司ったイベントのうち、コンクールと並ぶ柱は各種コンサートの開催だった。

当初発表された1887年10月17日のアレテには、オーケストラのコンサートについて次のように謳われていた。まず、「提案理由」の部分で、「全体としてはコンクールの原則が維持される。それはあらゆる種類の博覧会の基本原則である。しかし、オーケストラに適用するのは困難である。オーケストラは博覧会が単なるクラス分けの場になることを望んではいないだろう」と述べられ、ついで、条文第5項の1では、「さまざまな国籍のオーケストラのコンサート。総数は20以下のこと。演奏が許可されたオーケストラに対しては、手当が支給される」とあった。

その際、ベルジェが試算していたのは、各オーケストラが1公演に対して2,500フランを受け取るというもので、2,500フラン×20コンサート、計50,000フランが計上されていた。先に触れたドートルスムが手直ししたと思われる予算案Aにおいても、この部分は変わりなく、20公演に対し、50,000フランという予算が組まれていた。

この2,500フランという額は、オーケストラの1公演に対しての助成と考えれば、非常識な数字ではない。例えば、ドゥシェノーによれば、国民音楽協会に対して、1889年2,000フランの助成が行われたが、それはオーケストラのコンサートを開くための貴重な財源となっていたという（Duchesneau 1997: 27）<sup>4</sup>。また、当時、コンセール・コロヌやラムルー管弦楽団に国から支給されていた助成金が1万フランずつであったことを考えれば、1公演2,500フランの助成は決して少ないわけではない。特に、この趣旨に沿って外国の演奏団体にも助成金が出るとすれば、「世界のさまざまなオーケストラの競演」という万博にふさわしいコンサートになったはずである。

また、ベルジェが当初の案に歴史的な視点を加味した追加条項「(オーケストラの)コンサートのプログラムは演奏曲目の選択によって、さまざまな段階の音楽芸術の歴史画（タブロー・イストリッ

4 『メネストレル』に「音楽の散歩道 Promenades musicales」という題名で連載されたものを集めて単行本にしたのがこの本だが、両者の内容には若干相違がある。この部分は単行本にのみ掲載されている文章である。

5 これは Duchesneau 1997 のデータに基づくが、Chimènes 1991 では1892年から2,300フランの予算がつけられている。



ク)を示すように有益に作成されうるであろう」という一文が、ドートレスムのアレテの段階で、「この(音楽展)委員会は……歴史的コンサートやオルガン・コンサートのためのプログラムを提示することができる」と変わったことについては先に触れたが、いずれの文面でも、国籍条項がまったく入っていない、つまり「フランス」のコンサート音楽に限定していないことは注目される。万博のオーガナイザー側が望んでいたのは、世界のさまざまなオーケストラが競演することであった。

ところが、実際にプログラムの編成にとりかかった「音楽展」の委員会側の意図は、ベルジェたちオーガナイザーの意図とはまったく異なっていた。

## (2) 行政側と委員会の対立

### a. 「音楽展」準備の中間報告書

1888年6月、ベルジェは各セクションの委員会にそれぞれ大臣宛ての中間報告を作成するように指示し、それをとりまとめてベルジェ自身の意見も添え、6月27日に大臣に報告書を提出した。

フランス国立古文書館には第1セクションと第3セクションからベルジェに提出した中間報告と、ベルジェから大臣に提出した報告書が残されている(いずれもAN所蔵 F12/3768)。

ここで興味深いのは、第1セクションからベルジェに提出された中間報告である。レポーターのケルストの手によるこの中間報告の概要は以下の通りである。

- ・行政側の提案と委員会側の要求には隔たりがある。
- ・行政側の予算では50,000フランを20回のコンサートに分け、1回につき2,500フランということになっているが、委員会は100,000フランを要求する。内訳は8回の大コンサートに80,000フラン、外国のオーケストラの助成のために20,000フランである。
- ・第一セクションの委員会では下部委員会を設け(ジョンシエール、レティ Emile Réty (1833-1915)<sup>6</sup>、ルコント Lecomte (詳細不詳)、ゴダール)そこに委員のトマ、ドリーブ、ヴォルムゼル、ケルストが加わり検討した。
- ・その結果、パリの主要なオーケストラの指揮者とオペラ座とオペラ・コミック座のオーケストラの指揮者計5人を個別に呼んで、意見を聴いた。
- ・指揮者たちはいずれも2,500フランで万博にふさわしいコンサートを開くことは最初からできない相談であると述べた。
- ・この意見は下部委員会および本委員会全員の一致した意見でもある。

(ここでケルストは「これらの5人の指揮者は彼らの同僚にどのような権力があるかを知らないで各自の意見を述べたが」と書いている。つまり、「音楽展」には27万フランという予算がついたものの、それを管理するのはあくまで行政側であり、音楽家が中心となっている委員会ではないと

6 父子2代続けてパリ音楽院の事務局に勤め、オバールとデュボワの院長時代に辣腕を振るった。

いうことをあてこすり、オーケストラの指揮者たちがそれを知らないで自分たちに意見を述べたと書いているわけである。)

- ・コンサートを政府が主催するものにふさわしく立派なものにするには、1回10,000フランの助成金が必要である。これは1878年の各コンサートにかかったよりもかなり少なく、各指揮者たちの好意で実現する額である。
- ・このような状況であるので、最初の予算案に組まれていた額を増額し、次のような計画に大臣の同意がいただきたい。これはフランスの音楽芸術にとって最も益になるようにするためである。
  1. 20回のコンサートに5万フランの支給額は絶対的に足りない。
  2. 委員会は10万フランの予算を要求する。そのうち、8万フランは8回の大コンサートに充てられる。1回につき1万フランであり、少なくとも200名の演奏者（オーケストラと合唱）を含む。ソリストやポスターや広告などの二次的な費用についての問題は保留する。
  3. 10万フランのうち残りの2万フランは博覧会で演奏したいと望む外国のオーケストラの助成のための費用として行政側に残される。
  4. 8回の大コンサートのプログラムは、存命か否かを問わず、フランスの作曲家のもので、すでに公開の場で演奏されたものに限る。
  5. 少なくとも、そのうちの半数は存命のフランスの作曲家の作品に充てられる。
  6. 原則として、8回のコンサートのなかで、ひとりの作曲家の作品の演奏は一作品に限られる。
  7. プログラムはオーケストラの指揮者によって提示され、委員会の承認を得なければならない。
- ・トロカデロ宮を建築したエンジニア、ブルデ氏からドリーブ氏宛てに、ホールの損傷が激しいので、直ちに対策を施さないと観客に危険が及ぶという手紙がきた。善処をお願いしたい。

以上が第1セクションの中間報告書の概要である。明確に予算の増額、フランスの作曲家の作品の大規模なコンサートという2点が打ち出されていることが分かる。「すでに公開の場で演奏された作品」というしぼりがあるのは、もちろん1878年の万博で完全な新作10作品を選んでプログラムに入れたものの、駄作が多く評判が悪かったことをふまえてのことである。こうした曲目についての制限は、このまま公式コンサートの規定に織り込まれることになった。しかし、以下に述べるように予算の増額については難航した。

#### b. ベルジェの報告書

ベルジェは各セクションから出された中間報告書を取りまとめて、予算の修正案を作成し、1888年6月28日付けで大臣に送った。ちなみにこの時点で、商工業大臣はすでにドートレスムからルグラン Pierre Legrand に代わっていたことに注目したい。ベルジェにしてみれば、これまでのいきさつを把握していない新しい商工業大臣に自分の意見を通すことは難しいことではなかった。

ベルジェは、第1セクションから出された中間報告および要望に対しては隠さず、長いコ

メントをつけている。以下にその部分の訳を示す（下線は訳者による）。

同封の報告書からおわかりのように、第1セクションの委員会〔作曲〕はわれわれの示した予算案が受け入れられないようです。

委員会は常設で今回公演可能なフランスのオーケストラとして、5団体しか挙げていません。そしてその結果、その5団体でオーケストラと合唱を伴う8回のコンサートを分担することを提案しています。1公演につき1万フランを支給するという事です。

もし、この提案が認めたとすれば、最初の私たちの試算から3万フラン多い8万フランの支出になり、しかも、そこで演奏する外国のオーケストラに支給する財源は残されていません。

報告書の文面では、作曲委員会は私たちが考慮していない見地に立っているようです。つまり、委員会は行政側が組織するコンサートを、作曲の状況を示すために利用しようという考えに駆り立てられているようです。それも、私たちに割り当てられた資金を使って、私たちのコンサートが開かれるそのときに。私たちが追求している目的はそれではありません。私たちは自分たちのオーケストラが演奏の正確さという点において判断されることを目的としています。そして、大臣もおわかりのように、特別なコンサートによって、フランス音楽の神髄を明確にするという使命はもっていません。それは、私たちがほかの状況で、現代作家たちの文学的真髄を示す何らかの催しを企画できないのと同じことです。

従って、大臣に次のことを提案申し上げます。オーケストラのコンサートには、増額なしに、最初から割り当てられた5万フランのまますえおき、作曲セクションから名前の挙がった5つのオーケストラに、それぞれ一回ずつ、行政とセクション自体によって承認されたプログラムにより、演奏会を開くことを許可することです。

この条件で、5つのオーケストラはそれぞれ、セクションの要望どおり、一律1万フランを受け取ることができます。そこには、コントロールやセルヴィス・ド・ピュブリックの人員や必要な印刷やポスターのための副次的な費用も含まれます。このようにして、コンサートは、合唱は入るものの、独唱は抜きで開催されるでしょう。フランス音楽だけが演奏されます。

作曲セクションの委員会から推薦されたオーケストラは次の通りです。

1. パリ音楽院演奏協会 指揮者：ガルサン氏
2. コンセール・ド・ロベラ〔オペラ座〕 指揮者：ヴィアネージ氏
3. コンセール・ド・ロベラ・コミック〔オペラ・コミック座〕 指揮者：ダンベ氏
4. コンセール・ラムルー 指揮者：ラムルー氏
5. コンセール・コロヌ 指揮者：コロヌ氏

この範囲を守るのならば、ひとつのオーケストラにつき、1万フランという額は、平均少なくとも200人の演奏家を使うとして、法外なものではないと思われます。もし、すでにお話した副次的な費用に加えて、楽譜の複写やリハーサルの費用や演奏家の移動の費用などを考慮するな

らば。

1878年同様、コンサートはトロカデロのホールで開かれることになっています。あらゆる収益は、どのような名称であれ、行政側に組み入れられるでしょう。

御提示させていただいている報告書のこの部分を終わるに当たって、大臣に御注目いただきたいのは、今回の組織においては、外国のオーケストラには一切割り当てを残さないということです。

もし、これらの〔外国の〕オーケストラがやってきたとしても、1878年のことを思い起こせばよろしいのです。彼らは自己資金、またはそれぞれの政府の必要な助成を受けて行動しました。

フランスの芸術家が、1889年〔の万博〕には、私たちが音楽の演奏に十分な役割を果たさないと考えるとするならば嘆かわしいことですが、もし、この問題についていくらか抗議が出るとしても、好都合な前例があるので、問題なく、以下の方法をとることができるでしょう。つまり、抗議する者にはトロカデロのホールを、使用料を徴収して、私たちが費用をもつコンサートが開かれていない日に開く許可を与えるということです。

その場合には、それらのコンサートのプログラムは必ず作曲委員会と行政の承認を得ることになります。

同様に、私たちは何人かのオルガニストが出演するオルガン・コンサートの企画を許可できるでしょう。このコンサートについては、費用は完全に演奏家の負担になり、ホールは博覧会の観客に無料で開かれることになるでしょう。

以上が、第1セクションの中間報告に対するベルジェのコメントである。ここには、第1セクションの委員の理念に対する共感はまったく見られない。そして大臣には第1セクションの増額要求を受け入れないように圧力をかけ、さらには、抗議が出たときの対処法まで考えている。

ベルジェのこのコメントで重要な点をまとめておこう。

まず行政側は、オーケストラのコンサートの開催について、さまざまなオーケストラの力量を示す場として万博の資金を使うのであって、ベルジェが明確に述べているように、「フランス音楽の神髄を明確にするという使命」は考慮していなかったという点である。

また、第1セクション委員会の原案では、各コンサートのプログラムの承認は、委員会が行うことになっていたが、ベルジェはそこに「行政の承認」も加えさせていることも注目される。プログラムの内容まで行政がタッチするという姿勢の現れであった。

さらに委員会の原案では、1コンサートにつき1万フランで行うが、副次的な費用と独唱者の費用までは含まれていないとあったのを、ベルジェはすべて含んで1万フランということでオーケストラ側の負担を増やしている。音楽家側は独唱者の費用については別途考えるということで、当然、演奏する作品も独唱と合唱とオーケストラのための作品（カンタータなど）も視野に入れていたに違いないが、ベルジェはそれを逆手にとって「独唱者なし」の「合唱とオーケストラのコンサート」ということで限定している。

こうして、委員会側の要求とベルジェの厳しい査定のせめぎあいの結果が、実際のオーケストラの

コンサートに直接反映されることになった。

ちなみに、オルガンのコンサートに対しては、開くことは認めるが費用は自弁でというベルジェのコメントは、1878年のオルガン設置騒動が尾を引いていたとも考えられる（井上2001，井上2002）。

ベルジェから大臣に送った中間報告書を受けて、1888年7月19日付けのアレテが出された。その内容は、次の4点からなっていた。

1. 支出予算 第Ⅲ費目第7項目から支払われる6万フランが第1セクションの委員会（作曲）の裁量に任される。それは運営 Exploitation 担当ディレクtoor・ジェネラルと協力して、1889年万博期間中に、5回以上の、合唱つきのフランスのオーケストラのコンサート・シリーズを企画するためである。
2. 各回のコンサートの支出には原則として印刷、ポスター、コンサートの物質上行政上の企画から発生するほかのあらゆる費用が含まれる。
3. これらのコンサートのプログラムはすでに公に演奏されたもので、存命および亡くなったフランスの作曲家の作品に限る。プログラムの少なくとも半数はフランスの存命作曲家の作品に充てられる。
4. コンサートの規則とプログラムは行政の承認が課される。

以上のように、このアレテはベルジェの中間報告に沿ったもので、第1セクションのオーケストラのコンサートだけを問題にしており、音楽展の委員会に対する行政側の完全な勝利である。特に、第1項の「ディレクtoor・ジェネラル〔ベルジェ〕と協力して」という一文や第4項のプログラムや規則に行政の承認を課することなどは第1セクションの委員会の自律性を著しく制限した内容である。

こうして、第1セクションは、あらゆる費用を含んで、1コンサートにつき1万1千フラン、それが5回で5万5千フラン。さらに、オルガン・コンサートに5千フランを支出する、ということで決着がついた。

フランス国立古文書館のパリ音楽院関係のボックスには、院長トマが受け取ったベルジェからの直筆の手紙が残されているが（AN所蔵AJ37/11）、1888年10月14日付けの手紙ではベルジェは「7月19日付けのアレテで決まったオーケストラのコンサートの企画に専念し、委員会を招集し、規則とプログラムについて決めてほしい。ここにオーケストラのコンサートの予算案のコピーを同封する」と書いている。一見何の変哲もない文書であるが、これまでの経過を見てくると、この手紙からベルジェの第1セクションの委員会委員長であるトマに対する強硬な姿勢が浮かび上がってくる。ベルジェは有無を言わず、作業を指示しているのである。

さらに、ベルジェと第1セクションとの軋轢を示す事柄が存在する。先に、カンタータのコンクールで歌詞の一等賞を得たヴィケールが、作曲の賞が出なかった後で、第1セクションの委員会から歌詞の変更を打診されて、断固拒否した結果、コンクールは完全に失敗に終わった、といういきさつを述べたが、その後日談がある。このヴィケールの姿勢をティエルソは『メネストレル』で非難したが、

その記事に対してヴィケールからティエルソに以下のような内容の釈明の手紙が来たという (Mén : 6 oct. 1889)。

「私が自分の詩にいくつかの変更を加えることを承諾した後で、考えを変えたというのは確かです。しかし、なぜだかおわかりになりますか？」

「委員会のメンバーとパリ音楽院で話し合いをした正に翌日、ベルジェ氏から私にいかなる譲歩もしないようにと、公式に依頼がありました。次のような点が断言されました。

1. 彼〔ベルジェ〕は新しいコンクールには絶対反対である。
2. グノーが私のカンタータに曲を書くことを承諾した。

「私はベルジェ氏にいわれたことを信じて、彼にいわれたように努力しました。私はナイーブすぎたのです。まったく私のあやまちです」

この手紙についてはティエルソの記事の中に一部分しか載せられていないので、この文面だけから判断するのは危険も伴うが、ベルジェと作曲委員会側の関係が良好でなかったことは十分にうかがえる。

さて、ベルジェが大臣にあてた中間報告に戻ろう。第1セクションからの報告と要請に厳しい態度で臨んだベルジェであるが、第2、第3セクションに関しては、予算が行政側の試算を超過していないこともあって簡単に述べ、第4セクションについては、新しいイベントの提案に以下のように賛成している。

「……副委員長エミール・ジョナス氏から、ミュージック・ミュニシパル〔市町村楽団〕のコンクールを追加して開催する提案がなされたことに御注目いただきたいのです。1万5千フランが予定されています。この提案は非常に興味深く、全体として受け入れ可能と思います。しかしながら、この国際コンクールが第3セクション〔ファンファーレと吹奏楽〕と第4セクション〔軍楽隊〕の合同委員会で準備されるようにお決めいただきたくお願い申し上げます」とある。ベルジェが何に重きを置いていたかがよくわかる。彼にとっては、フランスの作曲家の後押しをして、フランス音楽の真髄を提示することが目的ではなかった。彼は多くの市民にアピールするイベントを求めていたのである。

ベルジェが各セクションからの報告をとりまとめて大臣に宛てた中間報告には、軍楽隊国際コンクールが開催可能かどうかについての言及は一切なされていない。しかし、実は第3セクションの委員会からベルジェに出された中間報告のなかで、「国際コンクールが軍楽隊だけに予定され、民間の団体には予定されていないのは残念なことです（軍楽隊コンクールは、もし実現したとしても、とても難しいでしょう）」と書かれている。1889年万博は革命百周年記念だったために、1887年3月17日、外国政府に公式の招待が送られていたが、多くの国が公式な参加を見送ったこともあり、それらの国々に軍楽隊の派遣を求めることは難しかったからである。

そうした状況下、第3セクションから、民間の楽団であれば、軍楽隊とは違って、万博のコンクールに参加することができるという報告がなされ、第4セクションから実際のコンクールについての概

要説明がなされ、その案をベルジェが採用したというわけである。

こうして、1888年8月1日付けの新しい予算案では、民間の楽団による国際コンクールの項目が新たに増え、15,000フランの予算が計上され、一方、オーケストラのコンサートには総額60,000フランが計上された。

一方、国際軍楽隊コンクールについては、フランス軍楽隊のフェスティバルに変更され、陸軍や海軍との折衝が始められた。

1888年12月、ベルジェは外国の団体に適用される規則と公式コンサート以外で参加するフランスの団体に適用される規則の検討をさせているが、大部分は1878年万博時の規則をそのまま適用するという方針が進められ、もちろん外国から参加するオーケストラに対する助成なども一切行われなかった。

## 5. オルガン・コンサートの企画

さて、年が明けて1889年1月17日、第1セクションの委員会から大臣に宛てて、オルガン・コンサートの規則の原案が示された（AN所蔵 F12/3768）。規則の作成に当たったのは、委員のうち、デュボア、フランク、ギロー、ジョンシエール、そして行政側の代表としてブロンド Blondot であった。1878年万博のときにオルガン・コンサートの開催に尽力したオルガニストのギルマンは今回、第3セクションのメンバーに名を連ねていたが、第1セクションの委員会に参加することはなかった。

報告書の中で委員会側は、我国と外国のオルガニストに演奏の機会を与えなければ「あなたの音楽展 *Votre Exposition musicale*」は不完全なものになるだろうと述べ、前回同様、トロカデロのオルガンを無料で使用させてほしいと要望し、今回は小額でも入場料50サンチームか1フランを徴収するという方針を告げている。1878年の万博時にはオルガン・コンサートは無料だったために、聴衆の出入りが多く、演奏の妨げになったことと、オルガン・コンサートにかかる費用を埋めるのに使えるというふたつの点から入場料を徴収するというのである。そして、1878年万博時には16回のコンサートでオルガンの保守費用に4,080フランかかったが、今回はコンサートの回数を15回に押さえるので、総額10,000フランの予算を新たに計上してほしいという内容である。

もちろん、ベルジェがそのまま承認するはずもなく、オルガン・コンサートのための費用は半額の5,000フランに削減され、第1セクションに割り当てられた6万フランのなかから支払われることで決着がついた。

この間、1888年暮れから89年にかけて、ふたつ作曲コンクールの審査が行われ、失敗に終わったことは先に述べたとおりである。財政的には、コンクールの入賞者がカンタータの作曲に関してはまったく出ず、軍隊行進曲に関しても1等が出なかったために、その分の予算が余ったわけである。そこでベルジェはまったく新たな企画を大臣に提案した。「ミュージック・ピトレスク」の開催である。

## 6. 政治的思惑——「ミュージック・ピトレスク」の開催

「ミュージック・ピトレスク（風変わりな音楽）」とは1878年万博の際、トロカデロ宮の小ホールで開かれたもので、民俗音楽のミニ・コンサートであったことを思い起こしておこう。この企画は今回

1889年万博の「音楽展」においては、最初の段階ではまったく存在しなかった。ところが、その「ミュージック・ピトレスク」が1889年に入ってからベルジェによって突然俎上に載せられたのである。

以下、1889年2月23日付けのベルジェから商工業大臣に宛てた手紙の内容である（AN所蔵 F12/3768）。

大臣殿、

あなたの尊敬すべき前任者のご要望に従って、私はタンブリネールのコンサートとコンクールの企画にかかわってきました。その最初のアイデアを出したのはブッシュ・デュ・ローヌ選出の代議士、レデ Leydet 氏です。

私はこのために非公式に私のオフィスに代議士のレデ氏とモーリス・フォール Maurice Faure 氏、作曲家・音楽教育視学官のH. マレシャル Maréchal 氏、オペラ座の記録保管人ラジャルト Lajarte 氏、パリ・プロヴァンス語作家協会会長ミシェル・セクスタン Michel Sextins 氏を集めました。彼らは私が必要な情報を最もじかに与えてくれるからであります。

彼らは私と同様、フランスの地方と外国のミュージック・ピトレスクのコンサートとコンクールを準備するに当たって対象を広げる余地があるとの意見でした。この企画はタンブリネールだけでなく、南仏やスペインのエスチュディアンティーナ *Estudiantina*<sup>7</sup>、フランスのさまざまな地方のホルヌミュージズ〔バグパイプ〕やビニュー〔ブルターニュ地方のバグパイプの一種〕、ヴィエールなどの演奏家に対しても適用されるでしょう。

したがって、このアレテにご署名いただきたいのです。委員会のメンバーの名前は、私のオフィスに集まってくれた人たちの同意を得て選ばれたものです。

敬具

ディレクター・ジェネラル

G. ベルジェ

ベルジェが大臣にアレテの署名を求める手紙を書いた1889年2月23日という日付に注意したい。これはティラール内閣が成立した翌日である。ベルジェは新大臣に事情を説明する必要があったため、このような内情を書いた手紙が残ったのだと思われるが、注目されるのは、代議士の要望で前任者の大臣とベルジェが動いたということである。企画を最初にもちかけた代議士レデ Victor Leydet (1845-1908) はエクスに生まれ、オリーブオイルの大きな会社を作り、政治家になった人物で、1881年以降下院、1897年以降は上院議員をつとめた。急進左派 (Gauche radical) に属し、いくつかの重要な委員会でレポーターをつとめるなど、かなり勢力があった。この代議士の提案を受けて「ミュージック・ピトレスク」の催しを開けば、地方に対して効果があるとベルジェは考えたと思われる。

大臣は当然、ベルジェのこの提案にすぐに署名した。

7 実態は不明だが、*estudiantin* (学生の) というスペイン語から派生した語と関係が考えられる。



こうして、音楽家の側ではなく、代議士の発案で始まった催し「ミュージック・ピトレスク」が万博の「音楽展」に後から割り込み、5,000フランの予算がつけられたのである。

だが、「ミュージック・ピトレスク」の開催は、単に地方出身の代議士の陳情によって決まったと考えるべきではない。もう一度、この手紙が書かれた1889年2月23日という日付に着目しよう。この時期、フランスはブーランジェ運動（1885年前後、ブーランジェ将軍を擁して起こった右翼の反政府運動）に揺れていた。ブーランジェ運動は1889年1月27日に行われたパリの下院補欠選挙で、まさに絶頂にあり、クーデタのうわさが広まった。結局ブーランジェは動かず、クーデタは起きなかったのだが、与党の共和派は巻き返しにかかった。「共和派の規律〔選挙の第1回投票で優位にある左翼候補のために、他の左翼候補が第2回投票で立候補を辞退する〕」が効果的に実行されたことで与党は立ち直った。1889年2月9日、下院の選挙制度を単記投票制に戻すことが可決され、2月21日、共和派はティラールを首班とする新しい内閣を組織し、反撃を本格的に組織した（オリイ2003：197-198）。その結果、4月1日、ブーランジェはベルギーに逃げ、共和派は無事、万博のオープンを迎えることになる。

ティラール内閣が成立した1889年2月21日以降、共和派は自分たちの政府を守るためにさまざまな手段を使った。万博も例外ではない。万博は共和派の強力な武器となった。ティラールは経済が専門だったため、首相と商工業大臣を兼ね、万博の最高責任者となったので、ベルジェが「ミュージック・ピトレスク」開催の提案を行った相手の商工業大臣は、実は、首相でもあるティラールその人であった。

この時期、共和派にとって、地方の地盤を確保することは緊急事であった。1888年4月以降、共和国の大統領はブーランジェ運動のプロパガンダに対抗して、地方への遊説を積極的に行うようになっていた（Ory 1989：136）。「ミュージック・ピトレスク」はまさしく地方懐柔策のひとつとして浮上してきたのである。

ブーランジェ将軍がベルギーに亡命した後も、共和派は安心するわけにはいかなかった。総選挙の結果、右翼が勝利することになれば政変である。こうして、不安定な政治的な地盤の上にいた共和派は「革命百周年」と直結した万博を自分たちのプロパガンダの装置として最大限に利用することになった。共和派の意図が直接反映されていたのが、万博の中で開かれた数々の「祭典」であったが、政治的意図とは一見あまり関係がないように見える「音楽展」自体、その影響を十分に受けていたのである。

## 7. 共和派のプロパガンダ

さて、作曲コンクールは入賞者がいなかったために予算が余り、第1セッションに関しては行政側で予算を抑制した結果、8月半ばの段階で「音楽展」にはなお多額の予算が残っていた。そこで、ベルジェは次のような手紙を首相（兼・商工業大臣）ティラールに書いた（AN所蔵 F12/3768）。

パリ、1889年8月16日

## 首相殿

同封の資料でごらんのとおり、私の手元には「音楽展」用にかかれた支出予算（第Ⅲ費目第7項目）275,000フランのうち、95,855フランが残っております。

私の考えでは、あらゆる見地から、特に政治的な見地から、オルフェオン、金管合奏、吹奏楽の4つのコンクールの受賞者に対して行われる授賞式にはいくらか輝かしさを与える必要があります。そうすれば、これらのコンクールの多数の参加者は、パリで見たものと自分たちが受けた待遇に関してすばらしい印象を持って、地元に戻ります。

同僚のディレクトゥール・ジェネラル・デ・トラヴォーの賛同を得て、私はアンヴァリッドのエスプラナードで試験的に2,000フランを越えない予算で先週の火曜日に、3,000人のオルフェオニストたちに対する授賞式を企画しました。彼らは先週の日曜日にトロカデロ〔宮〕でコンクールがあったのです。この式典は非常に成功し、それまで夕方には人気のなかったアンヴァリッドのエスプラナードは群集であふれました。

したがって、ここに同封するアレテに首相の署名をいただきたくお願いいたします。このアレテは10,000フランを支出予算第Ⅲ費目第7項目記載の275,000フランの残額から控除することを認めるものです。この10,000フランの総額は、1回につき2,500フランの割合で4つの式典を開くための支出に当てられます。1回は8月13日火曜日に、あとの3回は8月20日と27日の火曜日、そして、9月3日の火曜日にアンヴァリッドのエスプラナードで行われるオルフェオンと吹奏楽団の表彰式です。

同じアレテには9月末に行われる褒賞授与式のための音楽部門の支出35,000フランが明記されています。これはすでに予定されている通りのものです。

敬具

ディレクトゥール・ジェネラル

G. ベルジェ

こうして、いとも簡単に、オルフェオン関係の式典用にあらたに総額1万フランの予算が当てられ、大がかりな授賞式が4回も開かれることになった。行政側が何に重きを置いていたか、ベルジェが目指していたのは何であったのかを示す行為である。彼らは明確に政治的な意図をもって、地方のコンクール参加者を手厚く扱ったのである。

ここでベルジェが示している4つの式典のうちのひとつ、8月27日のオルフェオンの表彰式の様子について、『メネストレル』には以下のように述べられている（*Mén.* : 1<sup>er</sup> sept. 1889）。

〔コンクール〕翌日の火曜日、官房長 *chef du cabinet du ministre* パルマンティエ氏の主宰により、アンヴァリッドのエスプラナードで賞を受けた合唱協会すべての表彰が行なわれた。そのすぐ後に、第3回植民地祭が続いた。9時ちょうどに行列が始まった。部隊の馬に乗ったすばらしいアラブとセネガルの騎兵が先頭で進み、チュニジア人たちが徒歩で旗やのぼりや灯りをもつ

て続いた。その後、アルジェリア歩兵の軍楽（ヌバ）がレパートリーの主要な曲目を演奏しながらやってきて、その後、盛装したアンナン劇場の俳優たちを乗せた多数の人力車、アルジェリアやチュニジアのさまざまな〔カフェ〕コンセールの舞姫たち、セネガルの女性たち、そして、最後に小柄なジャワの踊り子たちが優雅にほほえみながら、歓声を送る群衆に向かって、偉そうに手を振ってあいさつする。コンセールの楽団とコンゴの黒ん坊が人力車に続く。アンナンの有名なドラゴンが行列をしめくくる。パビリオンと噴水盤のイルミネーションと、木立を包むベンガル花火の炎と、四方八方できらめくさまざまな明かりによって、スペクタクルはすばらしかった。かくして、この祭りの成功は完全なものだった。

表彰式と植民地祭の3回目がつながり、オルフェオンの表彰式に出席した地方のメンバーにはすばらしい土産話ができただけである。ベルジェが先に引用した手紙のなかで述べている「コンクールの受賞者に対して行われる授賞式にはいくらか輝かしさを与える必要があります。そうすれば、これらのコンクールの多数の参加者は、パリで見たものと自分たちが受けた待遇に関してすばらしい印象を持って、地元に戻ります」という意図はみごとに果たされたといえよう。共和国の偉大さを認識し、植民地に対する優越感を抱いて、コンクールの参加者は地元に戻ったはずである。共和派をアピールするには念の入った演出であった。

こうして、ベルジェたち、万博のディレクターは共和国の演出に力を注いだのだが、この話には、さらに裏がある。ベルジェは1889年9月22日の総選挙にパリの9区に共和派から立候補していたのである。この初選挙でベルジェは対立候補の元警視總監アンドリュウを6,127票対4,882票で破り、代議士としてのキャリアを歩み始めるが、この票数の差から見ても、決して楽な戦いではなかった（Ribeyre 1890）。したがってベルジェの選挙対策に「音楽展」の予算とイベントが使われたという見方も成り立つのである。

## 8. 結び

結果的には、9月22日と10月6日の選挙では共和派は366議席を獲得したが、保守派は168議席、ブーランジェ派は42議席にとどまり、共和派は躍進した。万博と「革命百周年」のイベントが効果を及ぼしたことは明らかであった（Ory 1989 : 70）。

こうして万博は、共和派の強力な武器として作用し、不安定な政治的な地盤の上にいた共和派は「革命百周年」と直結した万博を自分たちのプロパガンダの装置として最大限に利用することになった。共和派の意図が直接反映されていたのが、万博の中で開かれた数々の「祭典」であったが、政治的意図とは一見あまり関係がないように見える「音楽展」自体、その影響を十分に受けていたのである。

参考文献

Archives nationales, Paris [ANと略記] 所蔵

Série F12 博覧会関係文書

Série AJ37 パリ音楽院関係文書

*Exposition universelle de 1889, Rapport général administratif et technique par M. Alfred Picard.* 10 vols, Paris : Impr. nationale, 1890-91.

*Le Ménestrel* [Ménと略記] (Paris : Heugel, 1833-1940)

Chimènes, Myriam. « Le budget de la musique sous la IIIe République », in *La Musique et le pouvoir*, sous la direction de H. Dufourt et de J.-M. Fauquet, Paris : Aux amateurs de livres, 1987 : 125-145.

Duchesneau, Michel. *L'Avant-garde musicale à Paris de 1871 à 1939.* Paris : Mardaga, 1997.

Ory, Pascal. *1889 L'Expo universelle.* Bruxelles : Complexe, 1989.

Ribeyre, Félix. *La Nouvelle Chambre, 1889-1893, biographie des 576 députés.* Paris : E. Dentu, 1890.

Rimsky-Korsakov, N.-A. *Ma vie musicale*, adaptation de E. Halperine-Kaminsky ; préface et notes de Guy Erismann. Paris : Stock musique, c1981

Tiersot, Julien. *Musiques pittoresques : Promenades musicales à l'Expositions de 1889.* Paris : Fischbacher, 1889.

井上さつき「トロカデロ宮とフランスオルガン音楽」『モーツァルティアーナ——海老澤敏先生古希記念論文集』東京書籍, 2001 : 251-259.

井上さつき「フェスティバルホールのオルガン——近代フランス音楽の転換点——」『転換期の音楽』音楽之友社, 2002 : 261-270.

井上さつき「1867年パリ万国博覧会——音楽部門が芸術展示に加えられるまで——」『愛知県立大学紀要 No.32』, 2003 : 3-16.

オリイ, バスカル「フランス革命100年祭——1789年による証し」『記憶の場』第2巻 (ピエール・ノラ編) 所収, 渡辺和行訳, 岩波書店, 2003 : 195-233.